子どもの目

――「大きくなる子」の学習から――

松木　正子

きょう　ようちえんにいってみたら、いけのくみのいすは、ひくかった。
うみのくみのいすは、ちいちゃかった。
それでがっこうにかえってきて、じぶんのいすにすわったら、じぶんのいすがちょうどよかった。（後略）　W子

これは「大きくなる子」の学習の一つとして幼稚園訪問をした後の記録である。

幼稚園から小学校に入学したばかりの子どもたちにとって、何を・どのように学ばせるのかということは本質的な問題であるはずなのに深く検討されてはいないようである。幼稚園は幼稚園として保育園は保育園として、独自に保育をしているし（現行ではやむを得ないことなのだが）、小学校は今まで何の疑問もなく七教科に分化した教科指導を行なってきている。

だが子どもにとって学習とは何であろうか。入学したばかりの子どもにとって暦年齢の差は大きく、また適応の早い子と遅い子の差も明らかである。子どもの成長・発達をふまえて、どの子にもより効果的に基礎・基本を身につけさせることはできないだろうか。

この問題意識をうけて、本校では昭和55年度から「低学年における合科的指導」のあり方を研究することになった。一年目は、子どもの実態を考慮して幼稚園との違和感を少くしながら適応させることをねらった。そのために、時間割や既制の教科の枠にとらわれない総合的な大単元を作り、その中で種々の観点からテーマを追求していく形をとることにしたのである。

「大きくなる子」は、十月から十一月の半ばまでの期間を一区切りとする大きな単元である。七五三という社会的行事をフィナーレにし、それまでに教科や道徳などを有機的に結合させた学習である。この学習のねらいは次の四点に集約される。

○自己の成長について認識する。
○周囲の人々への感謝の気持ちを育てる。
○自分を見つめ、素直に反省する気持と向上心を持つ。
○社会的・文化的伝承行事に目を向け、関心を高める。

学習のねらいの中に「自己の成長を認識すること」を取り上げてはみたが、一年生の子どもは自分の成長をどのような形で認識するのであろうか。

一般に、空間関係・大小関係・時間関係・同一関係といった形式的な推理力は一年生ではまだ未発達で、七～八歳頃から課題に対して適切な具体的操作を与えていくことによって高めうるといわれている。そこで、学習計画をたてるときに、六年生の授業参観と附属幼稚園訪問を取り入れ、その都度自分のいる位置（生まれたときから十二歳までの数直線上の位置）を考えさせることにした。

まず六年の授業参観を行なった。机が、立っている子どもの胸の高さであること、むずかしい漢字があること、不思議な実験（金属を液体に入れて溶解実験をしていた）をしていたこと、どれも驚きの的であった。その中で次のような感想があったのは興味深い。

六年生は　むずかしいかんじのあるぶんを　ぼくたちがかくのとおなじはやさでかいていました。　O男

難しい漢字にではなく、それを自分たちがひらがなを書くように使いこなしていることが驚きなのであった。教室に帰ってもしばらくは、自分たちも六年生になったらあのようなことができるのであろうという期待と不安で興奮していた。

次の日は幼稚園の訪問であった。冒頭に記したW子は幼稚園のいすに坐ってみてその小さいことを、「ひくかった、ちいちゃかった」と強調している。学校のいすは「ちょうどよかった」のである。しかし感想はそこにとどまっている。S夫は、いすに坐った感想を六年生の参観の時と比較している。

（前略）いすにすわってみたらひざかかえをしている
みたいにちっちゃくてびっくりしました。
このまえ　六年生をみたときいすがたかくてびっくり
していたのに、ようちえんではいすがちいさかったです。
S夫

いすの大きさ（高さ）という具体物を通して自分の大きさを感じている。

大きさ（高さ）や位置というのは相対的なものでもある。自分が大きくなったからいすが小さく感じられるという推量へ進む子もいる。

ようちえんにいってみたら、ようちえんのときはちょうどよかったいすが、ちいさかったです。
ぼくがおおきくなったんだとおもいます。だからうれしいです。　A夫

いすが縮むはずはない。だからいすが小さく感じられるのは、自分が大きくなったことだと推量しているのである。そして自分の成長を素直に喜んでいる。

自分の成長の意識は体の大きさのみにとどまらない。

（前略）ようちえんのこはようちえんらしくてかわいいこでした。
わたしもかわいかったのかな。　K子

ようちえんへいってきてぼくたちよりとしがしたのひとたちをみてきました。
いってみたらずいぶんさわがしくて、ぼくはびっくりしました。（後略）　T夫

ようちえんらしくといい、わたしもかわいかったかな、という言葉の奥には、現在のわたしは幼稚園の頃とは違っているのだという意識がはっきりとうかがわれる。また半年前まで生活していた場が「さわがしくて、びっくりした」と感じるようになっている。

幼稚園訪問の後、「大きくなる」とはどんなことか尋ねてみた。すると背がのびる、足が大きくなるという答えの他に、のうみそが大きくなると答えた子がいた。また計算や、さか上がり、そうじ、泳ぎ、本を読むことなどのような「できるようになったこと」も含めるのだと考えられるようになってきていた。つまり学習し、体験した結果「大きくなる」ことが、いわゆる「成長」の意味に近づいたのである。

ところで、子どもたちの目は私たちに予想もつかないところまで見える目であった。

ようちえんのときは　ゆうぎしつがひろくおもったけど、一年になったらたいいくかんがゆうぎしつよりひろいからゆうぎしつがせまくおもえました。（後略）　H夫

わたしがようちえんにいたときはきがつかなかったのに、きょうみたらきがつきました。

そのきがついたことは、おちゃの水のおにわにでるときのいり口のまどにステンドグラスでやまのくみだったらそのうえにステンドグラスで山のえがうつっていました。

わたしがいたころは　きがつきませんでした。（後略）

F子

H夫は、いすのように坐ってすぐ比較できるものにとどまらず空間の大小を意識し、「たいいくかんがゆうぎしつよりひろいからゆうぎしつがせまくみえました」と根拠を示して述べている。またF子は、ステンドグラスに描かれている山や海の絵がクラスの名と対応していることをこの日初めて気がついたのである。ステンドグラスは高い位置にあるため普段は目につきにくいものである。おとなでも見過しやすいものである。F子も通園している頃は気がつかなかったのであろうが改めて見に来て、絵とクラス名との共通性に気付いたのだ。

「大きくなる子」は、この後、わたしの歴史作り、等身大の自分、新入生のためにチューリップの球根植え、七五三と学習が進められた。

子どもは未分化だとよくいわれる。しかし思いがけない認識にまで到達する目を持っている。その目を学校教育の中で大切にはぐくんでいきたいものである。

（お茶の水女子大学附属小学校）

＊　＊